

従兄弟からのメッセージ

江東区立第三砂町中学校 3年 油原 季晋

「痛い、痛い、痛い、」

のたうち回って痛みを訴える僕の従兄弟が、青梅総合病院から東京大学病院にドクターヘリで運ばれた。その間、わずか十五分。電車を使えば二時間かかるところだ。彼は九年前に腎明細胞肉腫という、世界でも稀にみる癌で亡くなった。二歳半から闘病五年。小学校二年生の夏だった。まだ五歳だった僕は、彼に何が起きていたのか、はっきりと理解することができていなかった。

当時は「集学的治療」が進歩しておらず、この癌の五年生存率は五〇%以下だった。抗癌治療→切除→退院。再発→抗癌治療→切除→退院を繰り返した。当時、腎明細胞肉腫を四回発症して退院することができたのは、彼が世界初だったと聞いた。亡くなったのは、五回目の発症から十一ヶ月後のことだった。

彼の自宅は青梅市にあり、病状が安定したときはその家で過ごしていたが、そんな中でも容態が急変し、ドクターヘリで二度搬送されたことがあった。一刻を争う事態だったが、ヘリのお陰で一命を取り留めることができた。ドクターヘリを一度出動させると約二百万円かかるそうだ。大きな金額だ。幸い、日本では救急車と同じ扱いでドクターヘリの運用費は税金でまかなわれる。また、東京大学病院の中には、都立の特別支援学校の分室があり、勉強が好きだった従兄弟が病院にいながら授業を受けることができて本当に良かった。

叔父はいつも周りの人々はもちろん、税金を納めてくれている人達に「本当に感謝している」と話す。僕は従兄弟の亡くなった事実と、彼の闘病生活を支えてくれた税金という存在をじわじわと意識するようになった。

日本には、およそ五十種類の税があり、色々な形で税金が引かれていく。その使い道も様々で、その多くは社会保障費に充てられている事も知った。中には、使用目的が明確ではないのに、予算があるからと税金を無駄に使用している。というニュースも気になるようになってきた。今後の社会保障費は足りるのだろうか？

国民から集められた税金は、困っている人や苦しい思いをしている人の生活を支える為に、使われるお金であって欲しいと僕は思う。また、僕自身も従兄弟のように、助けられる立場になるかもしれないということも想像しながら生きていきたい。一人ひとりが税金の使用目的と、それにより助けられる人達の事に関心を持ち、積極的に情報収集をし、より多くの人々が理解を深められる環境が広がってほしいと切に願う。

今、この時にも従兄弟のように病気で苦しんでいる子供達がたくさんいる。そんな子供達や、生活に困っている人達の未来を明るくし、助け合える環境を作るためにも、快く税金を納めよう。そう思えるような大人になりたい。